全国草原再生ネットワーク

草原がつなぐ、人・自然・文化

ニュースレターvol. 12 (Nov., 2012)

<発行>全国草原再生ネットワーク http://www.sogen-net.jp/



■「第9回全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ」について

10月27日(土)~29日(日)、群馬県利根郡みなかみ町藤原地区にて、第9回全国草原サミット・シンポジウムが開催されました。10月27日には現地見学会、10月28日には基調講演、各地からの報告、分科会などの草原シンポジウム、10月29日には、全国から集まった市町村長による草原サミット

が行われました。

シンポジウムやサミットの詳細は、新年1月の次 回ニュースレターで報告する予定です。また、実行 委員会からは報告書も発行される予定です。今回は、 サミット・シンポジウムの様子について、参加した 事務局メンバーから簡単に報告をします。

◇草原シンポジウム:基調講演・各地からの報告・分科会の様子

<基調講演>

基調講演では、和歌山大学大学院システム工学研究科の養父志乃夫氏より、「里山における人の営みが、生物多様な環境を維持」と題した講演がありました。

ひと昔前の里山の風景を写真などで示しながら、 私たちの身の回りにあった里山の姿、そこで営まれ ていた私たちの生活について、お話しがありました。 かつて草原は、里山の中の至るところに広がってお り、草資源を提供してくれる大切な場所だったよう です。

また、国内の各地における草原利用の事例紹介もありました。岡山県の下斎原地区では、かつて、火入れなどの範囲が定められた見取り図が作られ、大字ごとの土地利用がルール化されていたとのこと。島根県の隠岐郡知夫村では、牧と呼ばれる土地利用が行われており、島内の牧は4つの地区にわけられ、4年間のローテーションで放牧や畑作が交互に繰り返されていたとのことでした。草原を含めた里山が、いかに私たちの生活を支えてきたのか、あらためて振り返ることができる講演でした。



基調講演の様子

<各地からの報告>

各地からの報告は、山梨県の乙女高原、熊本県の 阿蘇、地元群馬県の上ノ原から、取り組みなどの紹介がありました。乙女高原からは、乙女高原ファン クラブの植原彰氏が「乙女高原の自然を次の世代に」 と題して、200名を超えるボランティアが集まる草 刈り作業などの紹介がありました。阿蘇からは、公 益財団法人阿蘇グリーンストックの山内康二氏が「阿蘇の緑を守る」と題して、近年注目を集めている九州の"水瓶"としての役割などの紹介がありました。上ノ原からは、森林塾青水の海老沢秀夫氏よ

り、「人と生き物が入り合うコモンズ村・ふじわら」 と題して、上ノ原で取り組んでいる森林塾青水の活動について紹介がありました。



乙女高原からの報告

<第1分科会>

第1分科会は生物多様性を生かした地域つくり、 「地域の生態系サービスを見える化する」というテ ーマでした。公益財団法人日本自然保護協会が宮崎 県綾町で行った「ふれあい調査」、ご当地みなかみ町 でのAKAYAプロジェクト、今回のサミット・シ ンポジウムの立役者である森林塾青水が藤原で取り 組んできた3つのマップ作りの事例紹介がありまし た。それぞれ地域や事情が違っていても、地域の人 達が一堂に会し、地域の自然(生態系サービス)を 理解し、地域の魅力を確認しあい、その魅力の伝え 方を知るというマップ作りの効果は共通したものが ありました。その上、マップという成果物が得られ るのです。時間をかけたマップ作りを通して、年代 や認識の異なる地域の人々が、地域の自然財産・資 源・文化について共通認識を持つようになり、ひい ては地域作りに発展させる姿が浮かんできました。 報告者はそれぞれ、マップ作りは地域作りのツール であると結んでいました。(高橋泰子:事務局)

<第2分科会>

第2分科会では「草をどのように活用するか」ということをテーマに、3つの事例が紹介されました。つくば山麓での「茅葺き建築の移築」、福島県での「茅の断熱材を用いた仮設住宅」、滋賀県での「ブランドとしてのヨシ製品」など、それぞれに興味深い事例

でした。どの事例にも共通することは、茅を利用する文化を「古いもの」「再生するもの」として捉えるのではなく、今日的な価値付けをすることで、十分に商品化・日常化が可能だということでした。また、火入れをしている草原であれば、良い茅を選んで集荷する「選別眼」と「技術」があれば、茅葺き原料としての製品競争力が上がるというアドバイスもありました。普段は保全の対象として関わっている草原を、活用の面から見ることで、草原が資源の宝庫に見えてきました。(白川勝信:事務局)

<第3分科会>

第3分科会は、「流域コモンズによる生物多様性 保全と価値評価」がテーマでした。草地を保全する 活動の価値をどう評価するかというのは難しい問題 です。草の利用という経済活動が普遍化していない ので、まがりなりにも全国的に産業化している森林 保全と比較したときにその価値の説得力をどう確保 するのかが問題となります。

ここでは、流域コモンズというくくりで下流側の都市市民と上流側の草原現地とが価値を共有することを目標に、草原の「見えない価値」をいかに経済価値に換算できるのかについて考えました。すでに生物多様性を経済評価する手法が世界で研究されており、これらを参考に受益者にとっての価値を量るツールをつくることが目指されています。

会場からは「経済価値評価だけで人は行動に向かわない」「地域のニーズは雇用創出して人を残すこと」との意見もあり、価値測定のツールは目的を明確にして考える必要性があると確認されました。(和田譲二:事務局)



<第4分科会>

第4分科会は、「草原と観光」をテーマとした分科会で、裏磐梯と大山・蒜山の2地域の事例が紹介されました。裏磐梯のエコツーリズムは、国内でも比較的成功している事例として取り上げられました。現在は多くの地域で取り組まれていますが、地域資源再発見の取り組みや講座などを、他地域に先がけて取り組んでいた点が、先進的地域とされる理由のひとつとのことでした。現在は、ガイドだけでなく、滞在時間の延長、とくに宿泊につなげるための工夫に力が入れられているとのことでした。大山・蒜山地区では、ブナの森教室、ブナの森トレッキング、



大山道トレッキングなどのプログラムを展開しており。現在は、山麓の農地を活かしたプログラム開発

を鳥取県と進めているとのことでした。(井上雅仁: 事務局)

<全体討論会>

分科会に引き続き、全国草原再生ネットワーク会 長の高橋氏の進行のもと、各分科会の報告、基調講 演などへのコメント、全体の討論が行われました。

会場からは、流域の水源が失われることへの危機 が薄いのではないか、各団体は大学生の参画を求め ているか、などの質問がありました。大学生の参画 に対しては、地域作りを含めて新しい風を入れるこ とができる、人手が足りない団体が多い中で大きな 力になる、などの返答がありました。また、行政へ 求めるものとして、分科会担当者からは、生物多様 性地域戦略づくりの旗振りをして欲しい、草原の保 全には公益性を全面に出す必要があるため下流の企 業・住民をつなぐためのパイプ役を担って欲しい、 行政の中で環境保全に関心のある職員を環境系の部 署に積極的に配置して欲しい、などの意見があがり ました。会場からは、都市域に残る貴重な自然を対 象とした生態系評価について事例があるのかといっ た質問もありました。短時間ですが、熱のこもった 討論会となりました。

◇草原サミットの様子

今回の草原サミットには、地元群馬県みなかみ町のほか、同じ群馬県の沼田市、片品村、川場村、昭和村、茨城県取手市、広島県北広島町、島根県大田市、熊本県西原村の9つの市町村長から、首長の参加がありました。みなかみ町長からは今回のサミットの趣旨が、北広島町長からは前回サミットの報告と、その後の取り組みについて報告がありました。同町では、サミット後、町の火入れ条例が改正され大規模な火入れが可能になるようになり、また、消防団が森林火災の訓練として出動するようになった、生物多様性の地域戦略野の作成、子ども農山村プロジェクトなどのツーリズムの促進が進められているとのことでした。また、参加されたそれぞれの市町

村からも、各自治体の紹介などがありました。 最後に、9市町村長の共同で、サミット宣言が行われ、閉会となりました。



※次回のニュースレター (2013年1月発行予定)では、サミット・シンポジウムについて、もう少し詳細な報告をする予定です。今回は、サミット・シンポジウムの熱気を少しでも早く、みなさまに報告したく、事務局を中心に報告させて頂きました。

■各地からの報告

◇「草地生態系研究会」設立報告

草地生態系研究会は、今年9月に公益社団法人大阪自然環境保全協会(以下、「保全協会」)の調査・研究グループの1つとして発足しました。運営委員は、保全協会の保護・調査研究部のメンバーで構成されています。「身近な生物多様性の宝庫『草地』を守りたい」という思いを共有し、保全協会内外で草地や草地の生き物を守る活動に関わるグループの方と一緒に、現地を歩いてディスカッションを行い、課題解決に取り組んでいきたいと考えています。さらに、活動の成果発表と広く市民への情報発信を兼ねて、年1回程度のシンポジウム開催を目標にしています。

去る9月29日(土)、大阪府和泉市の信太山丘陵において、第1回草地生態系研究会「信太山丘陵の草原をどう守り維持していくか?」を開催しました。信太山は大阪府堺市と和泉市に位置する総面積約300haのなだらかな丘陵地で、大阪府を代表する草原と湿地群が点在し、様々な希少動植物が生息しています。丘陵地の大部分(226ha)は自衛隊の演習地として利用されていますが、和泉市の市有地



信太山丘陵での現地見学

(16ha) については市民の保全運動が実を結び、自然環境の保全を図ることが市の方針として決定しました。研究会には、信太山の自然環境保全に関わる方々や一般参加者を含む21名の参加がありました。地元の方の案内のもと、信太山丘陵の主な草地・湿地を1時間ほど歩いて、動植物の生息状況を観察しました。その後、和泉市鶴山台連合自治会館に移動して、2件の発表が行われました。

最初に信太の森 FAN クラブの花田氏から、信太 山丘陵の特徴と、自然環境保全運動の経緯について 報告がありました。次に畠から、国内の草地の現状 と管理方法の事例紹介、信太山の草地を保全する上 での課題と考え得る対策を述べました。発表者への 質疑応答のあと、参加者を含めて活発なディスカッ ションが行われました。議論は主に、管理放棄によ り遷移が進んで繁茂しているネザサへの対策(刈り 取り時期や回数、刈草の処理など)、トウネズミモチ などの植樹された外来種の除去、シソクサやウスバ カマキリ、カスミサンショウウオなど希少動植物の 生息環境の保全に集中しました。議論に先立って、 参加者全員が現地を見回ったので、問題点の共有が 速やかに行われ、保全対策についての具体的な議論 が出来たと思います。研究会終了後、参加者の方か ら「草地の保全の話は今まで聞いていなかったので、 参加して良かった。」「いただいたアドバイスを自分 なりに活かして、少しでも良い方向に進むように活 動していきたい。」などの感想をいただきました。

今後、大阪府と周辺地域の草地を活動の場として、 少しずつ、つながりを広げていきたいと考えていま す。

(畠 佐代子:公益社団法人大阪自然環境保全協会 草地生態系研究会代表)

◇シンポジウム 「いのちを育む 印西の原っぱ」参加報告

少し前のお話になりますが、6月2日(土)に千葉県印西市で開催されたシンポジウムに参加したので、そのご報告をしたいと思います。

印西市は千葉県北部、東京から向かうと成田空港 の少し手前に位置します。駅前には大きなイオンモ ールが立地しており、典型的なニュータウンです。 せっかくですので駅の周辺も少し散歩してみましたが、全く平らな台地に小さな谷津がいくつも流れており、特徴的な地形だなと感じました。畑の土も非常に黒く、つい最近、関東ぐらしを始めた私にとって非常に新鮮な印象でした。この日の講演で、東京大学院の宮下先生から教えていただきましたが、北

総地域の草原は江戸時代以前から、軍馬の放牧地と して利用されていたそうです。印西の牧は江戸時代 には、小金牧という名の官牧の一つであったので 様々な史料が残っているようですが、馬の飼育の他 にも将軍の鷹狩の記録が残っているなど、草原の歴 史を紐解く上で、非常に興味深い草原であると思い ます。

さて、シンポジウムの方は主催者発表で160名と、 非常に盛況でありました。まずは、日本自然保護協 会(NACS-J)の高川さんから全国から見た印西の 原っぱの重要性について講演がありました。千葉・ 北総地域には谷津地形が広く分布し、草原にも様々 なタイプがあるため、自然のポテンシャルはとても 高いそうです。

次の西脇先生(宮崎大学)のご講演でも、印西の原っぱに対する印象が語られましたが、ニュータウン開発が行わているこのような土地にも関わらず、草原性の絶滅危惧種が分布していることが印象的とのことでした。また、このような草原は全国的にも稀で、非常に驚かれたとのことです。

宮下先生(東京大学院)からは、研究で調べられた印西の草原について、歴史と蝶の視点からご講演がありました。印西周辺には現在、パッチ状の草原の他に、谷津地形に分布する田んぼや斜面の雑木林、開発による宅地などがモザイク状に広がっていますが、先生の研究の結果、雑木林に隣接している原っぱに蝶が多いということが明らかになったそうです。また、それらの蝶は周辺の草原間を移動していることも明らかになりました。その結果、蝶からみてよい草原を守るためには、原っぱのネットワークを意識して保全することが大切であるとのことでした。

最後に、原っぱの保全活動を行なっている地元の



シンポジウムの様子 (NACS-J 高川晋-氏提供)

団体から活動報告がありました。この地域の会では、自然観察会の他、不法投棄ゴミの除去、行政と一緒になった川の自然再生など、多岐にわたる活動を展開されています。これまで私が見てきた草原は、大体が少し山の奥の方に位置していて、地域の高齢化や過疎化にしたがって維持に困っている、というところがほとんどでした。それに対して印西では、ニュータウンの大きな駅を降りたところから、ちょっと歩けばそこに草原や谷津が広がっています。また、千葉や東京など大都市圏が近いので、自然を楽しみに多くの方々が興味を持って関わっておられます。西脇先生のお話にもありましたが、新しく開発された街と昔ながらの自然、里山が非常に近い、とても貴重な地域なのだと思います。

今回のシンポジウムでは、草原やそれを取り巻く 自然環境がモザイク状に広がることで、東京のすぐ 近くのこの地域でもよい自然が残っていることを知 りました。他の地域の草原でも、このモザイク状の 環境を少し意識すると、より多様性のある環境を創 りだすことができるのではないでしょうか。印西で は、原っぱの保全活動はまだ始まったばかりのよう ですが、また良い報告が聞けることを楽しみにした いと思います。

【シンポジウム情報】

2012 年 6 月 2 日 (土) 13:30~16:30 (会場 13:00) 会場:イオンホール (イオンモール千葉ニュータウン店 3 階)

※北総線千葉ニュータウン中央駅より北側徒歩5分 参加者:160名(主催者発表)

<プログラム>

- ・印西の原っぱの全国的な重要性 日本自然保護協会 高川晋一
- ・講演① 『原っぱが育むいのち~水と土と生き物た ち』宮崎大学農学部 教授 西脇亜也
- ・講演② 『原っぱで育まれるいのち~草地の蝶』東 京大学大学院 農学生命科学研究科 准教授 宮下 直
- ・事例紹介① 谷田武西の原っぱと森の会 (原っぱを保全している団体の事例発表)
- ・事例紹介② 亀成川を愛する会 (生態系と水循環を活かしたまちづくり)

(横田潤一郎:東京都在住)

■「全国草原リレー」(第2回)

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで、各地 の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第2回 は、理事でもある笹岡氏に、これまでご覧になられ た各地の草原を紹介して頂きます。今回の執筆者が、 次回の執筆者へと原稿をリレーしていきます。

■草原と私■

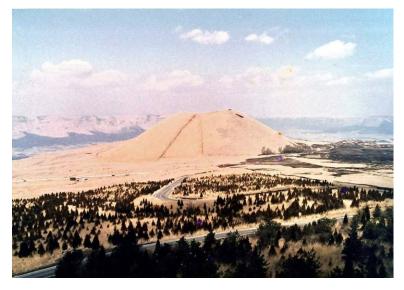
国安さん(前号)のような新鮮な話 題ではありませんが、思い出話で失礼 します。

1976年10月(36年前)、私は阿蘇で初めて国立公園管理事務所勤務に就きました。もうおなじみの阿蘇の草原ですが、当時の国立公園管理の仕事と草原との関係は、今とは全く違いました。国内屈指の畜産・酪農基地と期待された阿蘇の草原では、大規模な草地改良や管理道の開設、大型のサイロの建設などが進み、国立公園サイドは、むしろ風景保護の立場からこうした開発行為にチェックをかける立場にあったのです。それでも地域の畜産農家や牧野組合には勢いがあり、春の野焼き

や秋の刈り干し切りは、環境行政とは無縁の世界で着実に実行され、結果として観光客に昔と変わらぬ草原景観や、数々の風物詩を提供していました。草原景観の維持・再生がボランティア活動や環境行政のメインテーマとなった今日と比べると昔日の感があります。

阿蘇だけではありません。赴いた国立公園の現場には、必ず草原景観がありました。鹿沢湯の丸





阿蘇・米塚(1976年) 周囲の杉林が現在よりずっと小さい

高原(上信越高原国立公園)、乗鞍高原一ノ瀬地区 (中部山岳国立公園) は、いずれも牛馬の放牧地 として栄え、レンゲツツジの群生地として人気の スポットです。しかし最盛期には 300~700 頭放 牧されていた牛が、現在両地区とも 20~30 頭足らずに減り、灌木や白樺等の陽樹が侵入し風景が変わり始めました。地域の有志などがボランティアとして刈り払いや侵入木の伐採を始めましたが、



乗鞍高原・一ノ瀬(2004年) 牛と草原を観察する子どもパークレンジャー





鹿沢湯の丸高原(2008-2009年) 右はレンゲツツジ保存ボランティア活動

道のりはまだまだ険しそうです。

日本一小さな休暇村がある広島県・吾妻山(比婆道後帝釈国定公園)は、野草の宝庫として、カメラマンや登山者に根強い人気があります。ここも近在の農家による放牧が途絶え、草原風景の維持(乗用草刈機による)は、休暇村職員の仕事になりました。

国立公園や国定公園など、そこの草原風景が一

定の価値観に支えられ、何とか維持しようという 機運のある場所はまだしも、時代の流れの中で人 知れず消えていく草原は想像以上に多いのでしょ う。消えゆく前に少なくともその存在を記録し、 温故知新の素材としていく上でも、全国草原再生 ネットワークの文献収集やデータベース作成は重 要な事業だと、改めて自身にも言い聞かせる今日 この頃です。

(笹岡達男:東京都在住)





休暇村吾妻山ロッジ(広島県庄原市・2008年) 右:人が維持している草原景観

■書籍紹介

◇変容するコモンズ~フィールドと理論のはざまから~

編者:新保輝幸・松本充郎 出版社:ナカニシヤ出版

¥3,675(税込)

ISBN 978-4-7795-0647-5

自然資源を持続的に 利用するためにはどう すればいいのか、過少 利用など様々な問題を 抱える現代日本の山野 河海のフィールドから、 新しいコモンズ論を展 望しています。(出版社 の紹介文より)

阿蘇の都市住民が参 加する草原再生の仕組 み、三瓶山草原の過少



利用問題も取り上げられています。

序章 フィールドからコモンズを考える

第1章 サンゴの海の利用の現状と課題-柏島の海から考える

第2章 沿岸海域の「共」的利用・管理と法

第3章 流域管理と水産資源の持続的利用―高知県物部川

第4章 アユ 持続的資源の非持続的利用

第5章 都市住民との協働による阿蘇草原再生の取り組み

第6章 三瓶草原の史的展開と過少利用問題

第7章 低島における地下水の富栄養化問題とサンゴ礁劣化

第8章 地下水法の現状と課題

第9章 オープンアクセス・コモンズの数量分析

第10章 コモンズの類型と現代的課題

第11章 海洋自然資源の長期持続的利用のためのコストの理論

第12章 山野河海の持続的利用をめざして

終章 展望:フィールドから理論の見直し・政策提言,そして法制度へ

■草原をめぐる動き(2012年11月~2013年1月)

11/11-12 第1回茅葺きの里現地研修会(場所:新潟県佐渡市、連絡先:日本茅葺き文化協会)

11/17-18 第7回茅刈り&茅の運び出し、そして「山 の口終い」(場所:群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)

11/17-18 大内宿茅刈り&茅葺きワークショップ (場所:福島県下郷町大内宿、連絡先:日本茅葺き文化協会)

11/23 乙女高原草刈りボランティア(場所:乙女高原(山梨県山梨市牧丘町)、連絡先:乙女高原ファンクラブ)

11/23 千町原の草刈り (場所:広島県山県郡北広島町千町原、連絡先:芸北高原の自然館)

11/30 (独)農業環境技術研究所 研究成果発表会 2012「いのちと暮らしを守る農業環境」(場所: 新宿明治安田生命ホール、連絡先:独立行政法人 農業環境技術研究所)

1/27 野焼きがタチスミレを救う(場所: 茨城県坂東 市菅生沼、連絡先: 茨城県自然博物館)

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 12 2012 年 11 月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】第9回全国草原サミット・シンポジウムに参加してきました。草原を守ろう!残そう!とする多くの人たちから、熱意と元気をもらえた3日間でした。実行委員会などで準備をして下さったみなさま、お疲れ様でした。